

## 「禁じられた部屋」と好奇心

—ヨーロッパの昔話における異界との関わり方に関する試論 (2)—

細 谷 瑞 枝

本稿では、「禁じられた部屋」のモチーフを持つATU311タイプの話を取り上げた拙稿<sup>1</sup>に引き続き、ATU710「聖母の子」をもとにヨーロッパの昔話における異界との関わり方を「好奇心」からみていく。

### 1. 「子どもと家庭の昔話集」

ATU710タイプで広く知られているのは、グリムの「子どもと家庭の昔話集」(以下、KHM) 3番の「アリアの子」であろう。

#### 「マリアの子」<sup>2</sup>(要約)

その日のパンにも事欠く貧しいきこりが森で仕事をしていると、聖母マリアが現れ、彼の3歳の1人娘を引き取って、親代わりになろうという。天国で不自由なく育った娘が14歳になったある日、聖母が長い旅に出ることになる。娘は天国の鍵を渡され、12の扉は好きなように開けていいが、13番目の扉は開けないように言い渡される。12の扉の中にそれぞれ光り輝く使徒たちの姿を見た娘は、マリアとの約束を破り、13番目の扉を開ける。そこには三位一体が輝いていて、その光に触れた娘の指は金色に染まり、その色を落とすことができなくなってしまう。天国に戻ったマリアは娘に13番目の扉を開けなかったかと3回尋ねるが、娘はその都度否定するので、地上に追放される。同時に声も失った娘は、森の中で何年もすごすが、やがて王に見つけられて結婚し、子どもが生まれる。すると、マリアが現れて、事実を告白するように言うが、娘が否定するので、マリアは生まれた子どもを連れ去る。同じことが3度繰り返され、ついに娘は人食いの罪で火刑に処されることになる。娘のまわりで火が燃え始めたその時、後悔の念が湧きおこり、そのことで声を戻された娘が、扉を開けたことを叫ぶと、マリアが現れ、子どもたちも返される。

「マリアの子」の主人公の娘は、いわゆる「よい娘」ではない。貧しい境遇から天国へと偶然に救われたこの娘は、「灰かぶりKHM21」や「ホレおばさんKHM24」の主人公の娘たちとは違って、特別に働きものでもないし、言われたことも守らない。それどころか、言いつけに背いた事実を認めることをかたくなに拒み、いまわの際に至って漸く悔い改める。ここまで頑固な娘が、罪を告白するや否や即座に許され、子どもたちと声を戻されて王妃として幸せに暮らしていけるのはなぜだろうか。

この疑問を解くには、この話をキリスト教の教えから見ていく必要がある。主人公の娘

は、「禁じられた部屋」の扉を開けたこと（禁令侵犯，不服従）と開けたことを否定したこと（虚偽）のふたつの罪を犯す。普通であれば，不服従の罪の方がより本質的だと考えられるが，この話では虚偽の方に重点が移っているように感じられる。旅から戻ったマリアは，娘の胸の動悸を確認し，金色に染まった指に気づきながらもなお，「おまえは，やらなかったか」と重ねて尋ね，その都度否定する娘に「おまえは私の言うことを聞かなかった，そしてその上なお嘘をついた。おまえは天国にいるのにふさわしくない」と言い渡して天国から追放する。金色の指という扉を開けた確かな証拠があるのだから，マリアが求めているのは罪を認めることであり，地上で気がついた娘の声が出なくなっているのは，嘘をつく口に与えられた罰といえるだろう。そして，話の最後を締めくくる「だれでも罪を悔いて認めるものは赦される」というマリアのことはで刻印が押される。つまり，人間は罪を犯す，しかし，それを認めれば神さまは罪を許してくださる，というわけである。

ところで，グリムの昔話は主に弟ヴィルヘルムの手で文章が変えられていったことは広く知られており，初版からずっと3番である「マリアの子」も例外ではない。そこで，最終版（1857）とエーレンベルク稿（1810）を比べてみると，最終版ではキリスト教的な色が一段と強められているのが分かる。たとえば，エーレンベルク稿では，マリアが娘に渡す鍵の数は特定されておらず，娘は毎日ひとつずつ鍵をあけ，天国の住まいの美しさを見て喜ぶのだが，使徒については全く触れられていない。一方，最終版では「12の住まい」のそれぞれに「使徒たちのひとりが大きな輝きにつつまれて坐っている」というキリスト教的イメージと，13番目の部屋をあけた証拠としての「金色の指」が加えられた。マリアのことはによって，娘の罪が不服従より虚偽にあるようにみえることは既述したが，この点もグリム兄弟の加筆によってより強調されている。最終版では，マリアの言いつけに背いたことと嘘をついたことのふたつが天国からの追放の理由だが，エーレンベルク稿では「いいえ，私は入っていません」という娘のことはを受けてすぐ「おまえはもう天国にはふさわしくない」とマリアが言い，天国にふさわしくないのは，扉を開けたからなのか，嘘をついたからなのかは曖昧である。火刑の場でもエーレンベルク稿では「では，おまえは禁じられた扉を開けたことを告白するのですね」と尋ねるマリアに「はい」と娘が答えるのみで，最終版にある教訓的なマリアのことははグリム兄弟が付け加えたものだったのである。

とはいえ，マルガレーテ・M・ヴィルトが語ったエーレンベルク稿の「マリアの子」は大筋においてグリムのものと変わりなく，既にキリスト教的な昔話であった。ところが，ATU710タイプの話には，主人公の娘を引き取って育てるのが聖母ではなく，超自然的な女性である場合がある。グリム兄弟のもとにも「口のきけない女の子」というタイトルがつけられた別の話がフリーデリケ・マンネルから送られていた。

### 「口のきけない女の子」<sup>3</sup>（要約）

子沢山の貧しい男が，生活に行き詰って森で首をつろうとすると，4頭の黒い馬にひかれた黒い馬車に乗った黒い女が現れ，男の家に隠されているものと金の入った袋との交換をもちかける。男は同意するが，隠されているものとはその後

れた大きな森のなかの黒い城に娘を連れ去る。娘がすべきことは掃き掃除だけで、あとは城中何を見てもいいが、あるひとつの部屋だけは見ることをかたく禁じられる。娘は4年間従順に従うが、好奇心に苛まされて部屋を覗き、そこで読書に没頭していたように見える4人の黒い乙女たちを驚かしてしまう。すると娘の女主人が泣きながら彼女の前に立って言う。「いまはもう、おまえを追いついて不幸にするしかない。おまえは、どの感覚、どの授かりものを失いたいか」娘は話せなくなることを選び、城から追いつ出される。

翌日、王子が娘を見つけ、結婚する。やがて子どもが生まれると、この結婚に反対していた王子の母親が、赤ん坊を水に投げ込み、娘の顔に血をつけて人食いの濡れ衣を着せようとするが、王子が娘を許す。しかし、同様のことが繰り返され、3度目に娘は火あぶりにされることになる。そこへ、黒い馬車に乗って黒い女がやってくる。女は火を消し、娘は再び話せるようになる。馬車からは残りの3人の黒い女たちが娘の産んだ子どもたちを連れてきて、娘に祝福を与える。黒い女たちは呪いをかけられていたが、娘によって救われたと言って去り、王子の母は悪意とねたみのために息が詰まって死ぬ。

ふたつの話の違いは、養い親だけではない。「禁じられた部屋」の中にあるものは、方やキリスト教の究極の栄光の三位一体であり、方や黒い女たちが読書にふけるという謎めいた光景である。前者では扉を開けた事実を認めることによって主人公が罪を許されるのに対し、後者では事実を否定し続けることで主人公が黒い女たちを救うことになる結末も対照的である。もちろん、同じタイプの話であるから、主人公が好奇心に駆られて「禁じられた部屋」を見た結果、追放され、いったんは王との結婚という幸福を得るものの、再び危機に見舞われ、あわやのところで助かるという構成は変わらない。本稿は、「禁じられた部屋」の中にあったものの特性から、その後に主人公がとった行動の意味を考察し、ATU710タイプの昔話がキリスト教的に変容してきたことを跡付け、その変化にもかかわらず、通底する「好奇心」への肯定的な位置づけを明らかにする試みである。

## 2. ヨーロッパのATU710「聖母の子」

本章では、グリムの昔話「マリアの子」からヨーロッパ全般のAT710「聖母の子」の類話に範囲を広げ、「禁じられた部屋」を開けないように命ずる養い親が、グループ①：聖母マリアである話【表1】とグループ②：「黒い女」などの超自然的な女性である話【表2】に分けて、「禁じられた部屋」にあったものとその後の主人公の行動について考察していく。

【表1】

	タイトル	連れ去る人物	連れ去る場所	やるべきこと／ 禁止事項	鍵の 有無	部屋の中	問いの有無・ 回数／問いの内容	罰	追放後の経過	地域
1-0	マリヤの子ども Marienkind	聖母マリヤ	天国	13番目の部屋に入らない	有	三位一体	有・3回/13番目の扉を開けませんでしたか？	咄	森へ追放。数年後、王と結婚。生まれた子と聖母が連れ去る。3度目で火刑となること、悔いし事実を告白して赦される。	ドイツ (ゲリム)
1-1	マリーちゃん と 聖処女 Marietchen und die H.Jungfrau	老婆姿の聖母	(記述なし)	ある特定の部屋に入っていない	無	磔刑のキリスト、血を唇に塗る	有・2回/部屋に入りましたね？嘘をつくならことは取り上げますよ。	咄	1度目の否定で森に追放される。そこで再度否定するので、咄せなくなる。王と結婚。筆談。出産した子を聖母が連れ去る。王は妃が食べたと思う。3人目の時に王が子どもと共に火あぶりの刑を命じる。刑場でのマリヤの2度目の問いに肯定。王と幸せに暮らす。	リトアニア
1-2	聖母さまについて2 von U.L.Frauen2	青いマントの 優しい美女	12の黄金の間の 広間のある 宮殿	12の黄金の間の 除、13番目の小部屋に入らない	有	イエスの死を悼む聖母	有・3回/言いつけを守りましたか？	咄	森へ追放。7年後に城主と結婚。義母の陰謀で殺されそうになった子どもを聖母が救い、娘も許される。	ドイツ
1-3	マリユージュ カ Marijushka	森に遺棄された 子どもをマ リヤが拾う	教会	教会の祭壇を覗いてはいけない。	無	聖母が幼子イエスを抱く・玉座に包む・玉座につける姿	有・3回/祭壇を覗きませんでしたか？告白しないとひどいことになりすよ。	無 (話せるが、 弁明はしない)	3度とも否定。森へ戻される。ツァーと結婚。聖母が生まれた子の手、足、頭を娘の口に突っ込んで人食いの嫌疑をかけられる。娘は目を潰されて森へ追放され、そこで事実を聖母に告白して、視力と子どもを取り戻す。成長した子どもたちとツァーの後日談あり。	ロシア
1-4	聖母さまについて1 von U.L.Frauen1	聖母マリヤ	岩壁の中の 12の立派な 広間のある 宮殿	バラの世話/13番目の部屋には入らない	有	書斎で父と子 が人間の運命 を書き込んでいる。	無	無 (話せる)	父の元へ帰される。継母のもとでつらい目に会い、ついに家出。聖母の宮殿で修道女のように暮らし、天に召される。	ドイツ
1-5	代母としての処 女マリヤ Die Jungfrau Maria als Gevat- terin	優しい少女 (聖母)	(記述なし)	3つの部屋にだけは入っていない	無	それぞれの部屋から星 月、太陽が抜 け出る	無	咄	娘が謝るので2度までは許す。3度目に、口がきけない世界一の美女となり追放される。王子と結婚。義母の反対。天体を失ったときのマリヤの悲しみを体験させるためマリヤが生まれた子を連れ去る。3度目で許される。	ノルウェー
1-6	閉じ込められた娘 Die eingemau- erte Tochter	聖母が悪魔か ら娘を救う	きれいな庭 の中 の立派な家	4本の鍵が渡される。木の鍵で開く部屋には入っていない	有	イエスの傷を癒すマリヤ	無	無 (話せる)	マリヤが禁を解くまでは許さず、口がきけない子と結婚。生まれた子どもをマリヤが連れ去ったので、生きながら壁に塗りこめられることになる。最後の瞬間にマリヤが現れ、娘は赦され、家族と幸せに暮らす。	ルーマニア

(出典)

1-0: Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Darmstadt 1983

1-1: Leskien/August/K. Brugman/Litauische Volkslieder und Märchen. in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Deutsche Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

1-2: Schönwerth, Franz: Aus der Oberpfälz Sitten und Sagen. in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Deutsche Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

1-3: von Löwis of Menar, August Arthur: Finnische Märchen. in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

1-4: Schönwerth, Franz: Aus der Oberpfälz Sitten und Sagen. in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

1-5: Asbjørnsen, P.u. Moe/Jürgen: Norwegische Volksmärchen. in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

1-6: Schott, Arthur und Albert: Rumänische Volkserzählungen aus dem Banat. in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

## 2-1. 聖母の場合

グリムの「マリアの子」で娘が13番目の住まいに見た三位一体は、キリスト教の最も尊い教えを具現化したもので、ちょうどゼウスの真の姿をみてセメレが命を落としたように、通常、普通の人間はそれを見ることに耐えられない。「フィッチャー鳥 (ATU311/KHM46)」や「青ひげ (ATU312)」の「禁じられた部屋」にある死体の山が忌避の念を起すのと異なり、天国の部屋のタブーは、畏敬、畏怖の念に基づくものであろう。娘が扉を開けたことを認めないのは恐怖に駆られたのではなく、言いつけを守らなかったことを隠すためである。そのため、何を見たのかということは話の焦点からはずれ、聴き手、読者の関心もそこにはあまり向けられない。

グリムの「マリアの子」に類するグループ①の話でも、磔刑のキリスト、ピエタ、または幼子イエスの世話をする聖母など、キリスト教の象徴的形象が部屋の中に秘められている。ただし、これらは神の人間に近い一面であって、聖なる姿であることは確かだが、三位一体ほどの圧倒的な絶対性は感じさせない。

さらに、「マリアの子」では聖母に対する虚偽が最大の問題になるが、類話では扉を開けたその場で聖母に見つかるような展開のため、娘が嘘をつくという要素がないものがある (1-4, 1-5, 1-6)。その場合、罪になるのは言いつけに背いて扉を開けた行為だけであって、嘘はついていないのだから、虚偽は問題にならない。つまり、類話では、「過ちを犯しても、罪を悔いて告白することこそが大切である」というキリスト教的な考えはそれほど徹底していない。ここから、ATU710タイプの話で本来の問題視されていたのは、嘘をつくことではなく、「禁じられた部屋」を見たことにあるのではないかとの推測が可能になる。

ことばにして「扉をあけなかった」と言う、言わないは別にして、言いつけを守らなかった事実はどの話でも変わらない。主人公の娘は聖母の元から追放され、その時、たいてい声を失う。だが、この声の喪失の点でも類話は一貫していない。「マリアの子」のように嘘をついた罰として話せなくなるのは2話 (1-1, 1-2) だけである。1-5では、主人公の娘は口をきけなくなるが、「扉を開けたか」という問いはないので、娘が唾になるのは「嘘をついたこと」ではなく、「扉を開けたこと」に対する罰である。

その他の話では、話す能力は奪われない。普通に話せるのが1話 (1-4)、償いのために「話してはならない」と話すことを禁じられるのが1話 (1-6)、さらに話せるし、話すことを禁じられてもいないのに娘自身の意思で人食いの嫌疑に対して何も弁明しないのが1話である (1-3)。1-4では禁じられた部屋の扉を開けたことについて聖母が「そのことで罰するつもりはありません」と明言していて、罪と罰は話題にならず、その後の話の展開も他の話とは全く異なるので、以後は考察の対象から外す。1-3は聖母の残酷さと娘の頑なさのひととき目立つ話であるが、娘が最後に「はい、私は覗きこみました、お母さま。私には罪があります」と認めると、聖母が「もっと前にそれを言っていれば、苦しむこともなかったろうに」と応じるのが興味深い。つまり、娘の罪の意識は聖母の言いつけを守らずに祭壇を覗いたことあるのだが、聖母が重視しているのは罪を告白することの方なのである。1-6では、「見ることを我慢できなかった娘に、「話さないこと」が次なる課題として与えられる。娘は生きながら壁に塗り込められても黙り続け、言いつけを

守ったことで聖母に許され、子どもたちを戻され、幸せになる。この話で娘に求められていることは、あくまでも聖母の言いつけに従うことで、これはグリムの「マリアの子」が罪の告白を重要視するのとは明らかに異なり、次のグループ②とのつながりを感じさせるが、これはまた後に論じる。

本節では、養い親が聖母であっても、グループ①の話の「禁じられた部屋」には、グリムの「マリアの子」のほどに聖性の強い形象は認められないこと、主人公が嘘をついたことよりも「禁じられた部屋」に入ったことの方が問題であるというメッセージを汲み取れる話もあることが確認された。

## 2-2. 「黒い女」の場合

グループ②の類話の中で聖母に代わる者は、悪魔とのかかわりを持つなど何らかの意味で否定的な超自然的な女性である。彼女たちがみな「黒い女」と言われているわけではないが、便宜上、グループ②の超自然的な女性を「黒い女」と表すこととする。彼女たちは、グループ①の聖母と同じように貧しい親から娘を引き取る場合もあるし、娘が女のもとに奉公しに行く場合もある。前者の場合、親は娘を渡すことを躊躇するが、結局は女が約束する金や豊かな生活と娘を交換する。これは一種の契約であって、「黒い女」は、養い親というよりも、女主人という印象が強い。娘が連れていかれる森という場所は、グループ①の天国とは対照的だが、異界であることには変わりがない。城では部屋のそうじなどが課されることもあるが、何よりも娘が心がけるべきこと、それは、実は「禁じられた部屋」を開けないことである。娘にも、また読者・聴き手にもそうとはっきりは伝えられないが、「禁じられた部屋」を開けないことが「黒い女」を救う条件<sup>4</sup>だからであり、その課題を果たさせるために、「黒い女」は冒頭で娘の親と取引をし、娘を連れてきたとも考えられる。

しかし、昔話の常で、娘は「禁じられた部屋」を開け、そこにたいていは否定的な意味で驚くものを目にする。

「黒い女」が悪魔とトランプ（2-1）やダンス（2-2）をしている姿を見た娘は、恐怖と戦慄に襲われる。部屋を開けるなどという禁令がなかったとしても、見たものを口にするには勇気が必要だろう。その点が、悲しみや苦しみに沈む姿であっても神の姿を見たグループ①とは異なる。しかし、見たものが何であれ、それを口に出して言うことを慎むことがより重要であり、それをはっきりと示しているのが、2-3の話である。2人の姉妹が「禁じられた部屋」の中に見たのは、「黒い女」が「2人の乙女と本を読みながら沐浴をしている」、「紳士たちとテーブルついている」姿で、プライベートな場面ではあるが、特に秘匿するほどのものとは思えない。姉妹たちは、言いつけに背いたことを告白するには勇気が必要だったが、何を見たのかを言うことに抵抗はなかったにちがいない。だが、見たこと、そして見たもの、を正直に告白した彼女たちは首を刎ねられる。「黒い女」が住む森の中は異界であり、そこでの掟は現実界の、また、キリスト教のそれとは異なっている。ユング心理学者のフォン・フランツがATU710タイプの昔話について書いているように「母なる自然の恐ろしい秘密をつついてまわらないこと、もし、それをしてしまったら嘘を言って、何も見なかったかのようにふるまうのが、—この物語の見解によれば—



【表2】

	タイトル	連れ去る人物	連れ去る場所	やるべきこと／禁止事項	鍵の有無	部屋の中	問の回数・問の内容	罰	追放後の経過	地域
2-0	黙っている女の子 Das stumme Mädchen	黒い乙女	大きな森の城	そうじ／ある特定の部屋には入ってはいけない	無	読書をする4人の黒い女	無	唾	森へ追放される。王子と結婚。王子の母が生まれた子を水に投げ込み、娘に人食いの罪をかぶせるが、王子が許す。3度目で火刑に処されるときに黒い女が現れ、娘を助け、自分たちも救われたと話す。	ドイツ (グリム)
2-1	黒い婦人 The black lady	黒い女	古城	奉公／窓から覗かない	無	悪魔とトランプする黒い女	有／窓から何を見たのか？	無	退屈で眠く。逃げ出し、数年後、普通に結婚。何も見ていないというので、生まれた赤ん坊を黒い女に殺される。夫は火刑を望むが、養母がとりなす。2度目では刑の場に黒い女が現れ問いを繰り返すが、娘は否定。すると、黒い女は娘を解放して、子どもも返され、以後平和に暮らす。	ウェールズ ブリーゼン
2-2	名付け親	貴婦人	森の中の古城	屋間の机の上の箱と鏡に触らない	無	箱の中に井戸。指が黒くなる。鏡の中に悪魔と踊る名親。	有／包帯をした指はどうしたのか、指で何をしたのか？	無	事実を言えない娘は裸で追放される。金持ちと結婚。3人の子どもの謎の死。疑いをかけられて井戸の中に吊るされる。狐に事実を告白。事実を言ったことで名親は悪魔から救済される。	レトマレン
2-3	きこり The woodman	婦人	婦人の家	侍女／特定の扉を開けない	無	女主人の姿	有／扉を開けたか、何を見たのか？	無	姉妹は、それぞれに女主人の姿を見る。事実を話した姉たちは首をはねられ、事実を否定した未嫁だけが森に戻される。王と結婚。否定し続けるので、女主人が生まれた子どもを連れ去ることが2度おこり、娘は王に還せられる。王の再婚の宴に現れた女主人に再度否定すると、彼女が真実を王に告げる。女主人自身、禁じられた部屋の中に何も見ていないという人物が現れるまで解けない魔法にかかっていた。	イタリア
2-4	白状するか Bekennst du?	黒い女(魔女)	森の中の大きな家	ある特定の小部屋だけは開けない	有	死人が「白状するな」と叫ぶ	有／小部屋の扉を開けたことを白状するか。	唾	三択で唾を選ぶ。罫で崖から海へ突き落される。別の岸へ渡り、王子と結婚。否定し続けることで、魔女の試験に合格。子どもと両親と暮らす。	フィンランド
2-5	緑のガチョウ Die grüne Gans	緑の女	森の中の豪華な宮殿	毎日、多くの部屋の掃除とベッドメイク／ある特定の部屋だけは7年開けてはいけない	有	大きな緑の池と緑のガチョウ	無	なし	6年目にあける。あと1年の辛抱だったのに、また100年待たねばならないと責められる。娘は戻され、一家も元の貧しい状態に戻る。	ドイツ

(出典)

- 2-0: Hrsq.Derungs, Kurt: Die ursprünglichen Märchen der Brüder Grimm. Bern 1999  
 2-1: Groome, Francis Hindes : Gypsy folk-tales. London 1899([https://openlibrary.org/books/OL6907634M/Gypsy\\_folk-tales](https://openlibrary.org/books/OL6907634M/Gypsy_folk-tales))  
 2-2: 小沢俊夫訳：新装 世界の民話1 ドイツ・スイス ギョウゼイ、1999  
 2-3: Crane, Thomas Frederick : Italian Popular Tales.Boston and New York 1855([http://www.gutenberg.org/files/23634/23634-h.htm#Page\\_97](http://www.gutenberg.org/files/23634/23634-h.htm#Page_97))  
 2-4: von Lewis of Menar, August Arthur: Finnische Märchen, in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004  
 2-5: Schambach, Georg: Niedersächsische Sagen und Märchen, in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Deutsche Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

立派で正しいことらしい」。<sup>5</sup>また、同じくユング心理学者のヴェレーナ・カーストは、「メルヘンの禁じられた部屋においては、暗闇、すなわちキリスト教的・父性的な中心文化によって分離されたものがつねに問題となる」<sup>6</sup>として、禁じられた部屋に存在する様々な形象にキリスト教的ヨーロッパの文化の中で抑圧され、タブー視されているものをあてはめて解釈している。しかし、私たちは個々の形象の意味よりも、カーストがATU710の昔話を「禁断の木のメルヘン」<sup>7</sup>としていることに注目したい。確かにグループ①で、娘が禁令を犯して天国から追放されることと森の中で王と出会ったときに娘が裸であることを恥じることは、創世記のエデンの園からの追放の場面を連想させる。しかし、キリスト教的な形象は全くないグループ②も、好奇心に負けて「禁じられた部屋」を開けたがゆえに「黒い女」のもとでの不自由のない生活を失うという意味では、「失楽園」の構造を持っている。だが、聖母マリアが娘に対して絶対的に上位にあるのに対し、「黒い女」は娘に対して表向きは主人であるが、実は密かに自らの救済を娘に託しているのもであって、大きな二面性を持つ形象である。「黒い女」が悪魔とダンスやカードをする光景は確かに恐ろしいが、結局のところ、この「黒い女」も救済を望んでいたことが分かる結末からすると、この「黒い女」が悪魔と連む光景が「母なる自然の恐ろしい秘密」とまではいえなさそうである。「黒い女」や「黒い王女」はこれ以外のヨーロッパの昔話や伝説にも登場する<sup>8</sup>が、そこでも悪そのものではなく、悪からの救済を求める存在であって、「母なる自然」や太母像とは重ならない。むしろ、表面上は異教的に見えても、「黒い女」という形象が逆説的にキリスト教的世界観を表していると言えないだろうか。「黒い女」は、悪魔との関係を切りたがっているからである。

この話を黒い女の方から語ってみよう。自分の救済のために連れてきた娘は、救済の条件である「禁じられた部屋」を見るな、という命令に背き、救済は、当面失敗に終わる。しかし、娘が開けた事実を認めないことに望みをつなぐ「黒い女」は、娘を元の世界に戻す。「見るな」という禁令は侵されたが、それに代わって、今度は見たことを「話すな」というのが、新たな救済の条件になる。「黒い女」は、3度まで娘の意思を試したが、娘は試練に耐え、何も話さなかったので、「黒い女」は救済され、娘も幸せな暮らしを得る。

しかし、なぜ娘が黙っていることが、「黒い女」の救いにつながるのだろうか。実は、見たことを話さないという「黙秘」は、ここで二重の役割を果たしている。「見るな」に代わる「話すな」という第2の禁令を娘に課したのは、「黒い女」ではなく、娘自身で、沈黙は自分の身を守るためだった。ホレおばさんのような霊的存在と出会うとき、また魔女の集会などにおいても、沈黙を守ることが何よりも危険を避ける条件になるからである。<sup>9</sup>他方、この沈黙は、「12人兄弟 (KHM9)」、「6羽の白鳥 (KHM49)」で兄たちを救うために何年も黙り続ける妹の沈黙とも重なる。話の前半、「黒い女」の領域、異界へ連れてこられた時点では、娘を「黒い女」と内的につなぐ要素は全くなかった。しかし、「禁じられた部屋」を開けたことで、娘と女は秘密を共有するものになる。それゆえ、自分を守る娘の沈黙は、そのまま「黒い女」の救済の手段にもなるのだと言えそうである。

だが、このように考えてもなお、娘の沈黙と「黒い女」の救済の結びつきには、どこか違和感が残る。「禁じられた部屋」にいる「黒い女」は悪魔といえるからおぞましいのであって、救済を求める「黒い女」自身は、娘が自然と口を閉ざすほどの負の威光を具えてはい



ない、つまり娘が思わず口を閉ざしてしまい、自分の命と引き換えにしても黙り続けるような霊的な存在、「母なる自然」とは考えにくいのである。そこで、残るもうひとつの「黒い女」の話、「白状するか」(2-4)に目を向けることにする。

「白状するか」<sup>10</sup> (要約)

あるところに大酒のみの鍛冶屋がいて、身上をほとんど飲みつくし、残った銅貨6枚で縄を買い求め、森で首を吊ろうとする。そこへ、黒い馬に乗った老婆、実は魔女、が通りかかり、やがて鍛冶屋のもとに生まれてくる子どもが15才になったら渡すという約束で金の詰まった袋をくれる。家に帰った鍛冶屋は人が変わったように真面目に働き、やがて女の子が生まれる。この子は生まれて4週間で話し始め、刺繍や縫物に見事な腕前を見せる。約束の日に、魔女が現れ、娘は黒い馬の馬車で森の奥深くにある大きな家に連れていかれる。魔女は娘にたくさんの鍵を渡し、どの部屋に入ってもいいが廊下の小部屋にだけは入ってはいけないと命じる。しばらくの間、娘は言いつけを守っているが、ある日扉を開けてしまう。すると扉と銅線でつながれた死人の頭が彼女の方を向いて起き上がり、「白状するな」と叫ぶ。

「おまえは廊下の小部屋を開けたな」と言う魔女に対し、娘は「いいえ、やっていません」と答えるが、魔女は罰として娘を唾にし、さらに裸にして高い山から海に突き落とす。しかし、娘は助かり、対岸の森に暮らしていたところを、狩にきた若い王に見つけられ、結婚する。子どもが生まれると魔女が現れ、「白状するか」と尋ねるが、娘は「いいえ」と答える。魔女は子どもを取り上げ、娘の横に骨をおいて娘が子どもを食べたように見せかける。人々はそれを信じるが、王が娘を守る。しかし、同様のことが繰り返され、3度目に娘は火あぶりの刑を宣告される。処刑場の薪の山に行くまでの3つの囲いの扉がそれぞれに「白状するか?」と尋ねるが、娘は毎回「いいえ」と答える。さらに火が服を燃やし始めたとき、魔女が現れ、もう一度「白状するか」と尋ねても、娘は「いいえ」と答える。すると魔女は火を吹き消し「おまえはずっと強かった。ほら、おまえの子どもたちだよ」と子どもを渡し、ことばも戻してくれる。話せるようになった娘は、王と城に戻り、両親に会いに行く許しも得る。「でも魔女はそれから彼女をそっとしておいたんだ、娘は魔女の試験に受かって白状しなかったからね」

この話の特徴は、「黒い女」が魔女とされていることである。娘が小部屋を開けたことを厳しく執拗に追及する魔女の「禁じられた部屋」には死人がいるが、この死人は首に銅線を巻きつけていて、話の冒頭、銅貨で縄を買って首を吊ろうとした鍛冶屋、娘の父親を連想させる。想像を膨らませれば、魔女との取引の後、鍛冶屋は生まれ変わったように働き始めるのだが、それはそれまでの鍛冶屋が死んだということでもあり、金と娘を交換するほどに酒に溺れる自分勝手な父親を魔女は娘に秘しておいたのではないだろうか。

だが、娘は扉を開けてしまい、死人は「白状はするな」と叫ぶ。威しのようなこのことばが、実は娘への助言となる。魔女が隠しておいた否定的な父親が、魔女との対応の仕方、

すなわち黙秘すべきことを娘に教えるのである。

ここまで深読みをしなくとも、「禁じられた部屋」にある死体が魔女の秘密であるとすれば、それをとにかく口外してはならないという知恵は、フォン・フランツの解釈とも、沈黙が色々な意味で身を守るという民間信仰とも一致する。ここでの魔女は、キリスト教によって貶められた太母であり、ホレおばさんやパパ・ヤガーと同類である。だからこそ話の最後でも他の「黒い女」とは異なって、魔女は救済されない。その必要がないからである。

魔女＝太母としてこの話を冒頭から読み解いてみよう。自らの命を断つしかないほど行き詰った父性と太母との契約ののちに生まれてきた娘は、15才になるまで父性の肯定的な面だけを見て育つ。約束通り、娘を引き取った太母は、父性の否定的な面を隠しておくが、娘はそれを見てしまう。禁を犯すという行為で太母への盲目的な従属関係を壊し、同時に父性の否定面を知りながらなお、その助言に従う娘は、太母の怒りを買ひ、罰としてことを奪われ、追放される。しかし、この太母の秘密を知った少女は、今や女性へと成長し、王と結婚する。そして、母となったあかつきに、太母のさらなる試練に耐えうることを証明し、最後には彼女の祝福を受け、父性との関係も回復して幸せになるのである。

### 3. ATU710タイプの話の変遷

「白状するか」の超自然的女性は、娘を保護し、娘の好奇心による約束違反に再度関係修復の機会を与え、娘が試練に耐え抜けば、しかるべきときに祝福を与えて去っていく厳しくも優しい女神である。しかし、この女神が「魔女」とされたところから、キリスト教化が始まる。「白状するか」ではまだ異界を1人で支配しているし、娘は畏怖の念から見たことを話さず、この沈黙が娘に幸せをもたらす。しかし、やがて魔女は、悪魔に囚われ、救済を求める「黒い女」にまで貶められる。そのことによって、娘が「禁じられた部屋」を見たことを黙っているということに別の意味、すなわち「黒い女」の救済が付加される。否定的な「黒い女」から肯定的な超自然的女性像、すなわち聖母マリアへの変化は大きい。が、両者をつなぐ要素には導入部の娘を救うという行為が考えられる。娘を引き取るのが聖母になるのに応じて、「禁じられた部屋」の中味を聖なるものにすることは容易であるが、聖母の言いつけに背いて部屋を開け、しかもそれを否認し続ける娘が結局幸せになるという展開をそのまま肯定するのは、キリスト教の立場からは難しい。そこで、娘の沈黙とそれゆえに身の潔白を弁明できない状況を聖母による罰とし、贖罪が済めば幸せになれる話（1-2, 1-5）や、娘が話さないのは、イエスが娘に「話すな」という別命を与えたからであり、黙り通すことが主の意にかなうという理由づけ（1-6）が考えだされる。理由が必要だということは、それだけグループ②の話の黙秘の意味が分からなくなったということの現れであるが、それでも1-6は沈黙が娘の幸せにつながるという部分を維持し、その点でグループ②との重なりがある。

さらに、キリスト教色が強められたのが、残りの2話（1-1, 1-3）である。ここで聖母は「黒い女」と同じように「禁じられた部屋」について娘に尋ねているが、その問い方が少し異なる。「黒い女」は、「窓から何を見たのか」（2-1）、「その包帯をした指はどうか。指で何をしたのか」（2-2）、「扉を開けたか。何を見たのか」（2-3）と娘が見たものを気にしている。それは、部屋の中に隠してあったのが「黒い女」自身の見られ

たくない姿だからである。それに対し、聖母の方は、「部屋に入りましたね。嘘をつくならことばを取りあげますよ」(1-1)、「祭壇を覗きませんでしたか。告白しないとひどいことになりますよ」(1-3)と開けたかどうかを問題にしている。この点は、「あの時、小部屋の扉を開けたことを白状するか」と尋ねる「白状するか」の魔女も同じなのだが、これは魔女にせよ、聖母にせよ、娘とは圧倒的な力の差があるので、部屋の中に何があろうとも、問題になるのは娘が従順に言いつけを守ったかどうか、だからであろう。既に見てきたとおり、相手が魔女の場合は、禁を犯したことを否定し続けるのが、正しい対処法であった。しかし、開けてはいけなと命じたのが聖母となれば、黙り通したまま、すなわち嘘をついたまま幸せになる、というのはとても受け入れがたい。そこで、キリスト教の教えに沿うように大胆な変改がなされ、娘は最後の最後で罪を認めることになる。グリム兄弟は、この過程に連なるものとして、キリスト教の教えを巧みに細部に織り込み、聖母マリアのあのことば、「罪を悔い、告白するものは、誰でも赦されるのです」を加えてキリスト教的整合性を補強したのである。

大局的にみると、ATU710は、グループ②からグループ①へと変遷してきたと考えられる。しかし、その変化は時系列に沿って直線的に進行したわけではなく、「白状するか」から「マリアの子」までキリスト教色のグラデーションを描いているようなものである。たとえば、「名付け親(2-2)」の娘は名親が悪魔と踊っているところを見たが、勇気がなくて本当のことを言えず、追い出される。結婚後、娘は、子どもの謎の死の犯人だと夫に疑われ、井戸に吊るされるが、そこに現れた狐に見たことを告白すると、狐が名付け親に変わり、娘が本当のことを言ったので自分は救われたといって、子どもを返してくれる。この話では、超自然的女性は、悪魔に囚われた「黒い女」だが、娘が事実を自分の意思で「言わない」のではなく、勇気がなくて「言えない」点と「黒い女」の救済が事実を告白することによってなされる点にグループ①の要素が見られ、同じようにグループ①と②の間に位置する「閉じ込められた娘(1-6)」とはまた異なったキリスト教的色調が感じられる。

#### 4. 異界と好奇心

前章まで、ATU710タイプの話の変遷とキリスト教の関わりをたどってきたが、本章では、道具立てや筋の変更にもかかわらず、この話形に共通している構造からヨーロッパの昔話の異界観の一端を明らかにしたい。

ヨーロッパのATU710タイプの話では、部屋に入ることを禁じる超自然的女性が、聖母か「黒い女」かで、主人公の娘の取るべき態度は正反対になる。しかし、その他の点は娘に関する限り、どちらの場合でも全く変わりはない。同じ話形なので当然ともいえるのだが、主人公の態度を180度変えてまでも保持される強固な構造の要となるのが好奇心なのではないだろうか。

話の冒頭、娘は、ほぼ例外なく貧しさなどの逆境にいる<sup>11</sup>。娘が異界へ立ち入ることになるのは、たいていの場合、貧しい親と超自然的女性の取り決めの結果であって、自分の意思ではない<sup>12</sup>。好奇心に駆られて「禁じられた部屋」を覗くことは、いわば娘の初めて

の自発的行為だったのである。禁令違反は、もちろん、異界の不興を買い、追放されるが、現実世界に戻ると王との結婚という幸運にめぐりあう。王が娘を結婚相手にする理由を娘の美しさとする話もあるが、その美しさも異界の秘密を知っていることに由来する魅力なのではないだろうか。つまり、異界での好奇心は、最終的には肯定的な結果を主人公にもたらす契機になる。ただし、好奇心は無条件に認められるものではなく、王妃となった娘は、異界と自分との関わりについて口を閉ざすことによって初めて王との生活を永続させることができる。異界は人に幸をもたらしうが、その秘密は安易に他言するべきではない、という元々の知恵がグループ②の話には込められている。

他方、異界での好奇心による禁令侵犯は、キリスト教の失楽園の構造ともぴたりと重なる。禁断の知恵の実を食べたことに由来する原罪は、キリスト教では宗教的事実であって、人間の変えようのない出発点である。一介の娘である主人公が好奇心を抑えられるはずがない。それゆえ、聖母が登場するグループ①の話では、好奇心によって禁令が犯された事実はそのままに、娘の取るべき道を逆転させる。いずれにせよ、異界の秘密に対する好奇心の強さと畏れは、グループ①と②に共通で、ヨーロッパのATU710の特徴であると思われる。このことは、同じく「禁じられた部屋」のモチーフを持つ日本の「鶯の内裏」(196A「見るなの座敷」)と比べると明らかになる。

#### 「鶯の内裏」<sup>13</sup> (要約)

若い娘が毎日お茶を買いに来るのを不思議に思ったお茶屋の番頭が、娘の後をついて行くと、林の中の立派な御殿に着き、娘に歓待してもらう。しばらくすると、娘は次の12の座敷は見てはならぬと言い置いて出かける。しかし、番頭は1月の座敷から12月の座敷まですべて見てしまう。最後に鶯が鳴いて御殿は消え、番頭は元の野原に戻っている。これは、鶯の内裏というところで、容易に人のいれないところだという。

ヨーロッパの話に比べると、日本の話はいかにも淡白な印象を与える。異界との敷居が低いと言ってもよい。この話では男の好奇心が異界へ立ち入るきっかけとなるが、類話では道に迷ったりして偶然行きつくことの方が実は多い。生活の苦しさゆえに娘を超自然的な女性に引き渡すというような逼迫感はない。「禁じられた部屋」に関しても、鍵が渡されるのは1話だけで、蔵、座敷、たんすと形は変わってもどれも簡単に開けられる。その中にあるものも四季折々の風景や月々の暮らしの営みで、ユートピア的に美化されているが、死人や悪魔がもたらす恐怖とはもちろんのこと、三位一体の崇高さとも無縁である。そのためか、覗いた男が衝撃を受け、罪を自覚することはなく、ただ元の場所に戻されるだけでたいい特別な罰は与えられない<sup>14</sup>。異界との遭遇は、結局、男に何ももたらさない。

むしろ、禁を課した娘 — その正体は鶯である — の方が、読経の労を無にされたり卵を割られたりの被害を受けることが多い。この点は、ヨーロッパのグループ②の話で、「黒い女」の救済が「禁じられた部屋」を見ることによって失敗することと共通性があり、特に「緑のガチョウ (2-5)」と非常に似ている。

「緑のガチョウ」<sup>15</sup> (要約)

12人の子持ちの夫婦の長女が期限付きで緑の女に雇われ、7年間「禁じられた部屋」を開けてはならないと言われ渡されるが、6年目を過ぎた時点で、部屋を開けてしまう。そこには大きな緑の池に緑のガチョウが浮かんでいて、娘に気づくと消えてしまう。やがて現れた緑の女は、自分を救済できる者が生まれるまで、また100年待たなければならない、と娘をひどく責める。その後、娘は元のところに戻され、一家は、以前と同じように貧しくなってしまった。

ヨーロッパにもこのように「禁じられた部屋」を開けたことに続く後半の部分がない昔話があるのは興味深いが、このような話は他にはなく、これは昔話というよりむしろ伝説に近いのではないと思う。「緑のガチョウ」以外のヨーロッパのATU710タイプの話では、異界で「見るな」のタブーを破ったあと、現実世界での第2ラウンドが続き、苦難を超えて、最後のハッピーエンドになるのが定番である。一方、日本にも「禁じられた部屋」のモチーフがあって、しかも異界を訪れた者が宝を手に入れて幸福になる話はある<sup>16</sup>。ただし、その成功のもと「見るな」というタブーを犯さないことなのである。しかも、見ないことで宝を手に入れる話は、見てしまう話に比べて圧倒的に数が少ない。日本の昔話の世界においても、異界に対する好奇心を抑えることはやはり難しい。しかし、抑えられずとも、さしたる障りなく現実界に戻ってこれるという一種の近しさが日本の昔話の異界観の特徴である。

これに対し、ヨーロッパでは、異界の秘密の扉を前にして、それを閉ざしたままにしておくことは考えられない。そもそも異界への心理的距離が日本より遠く、ふらりと迷い込むところではない。たったひとつに限定された「禁じられた部屋」という設定も特別な印象を強めるし、実際、それを開けることで主人公は異界の脅威にさらされるが、対応さえ間違えなければ、破滅することなく、現実界に戻され、第2の試練が始まり、最後は幸せになる。対応の仕方は、主人公が連れていかれる異界の支配者によって異なるが、好奇心こそが異界の宝を手に入れる最初の鍵ということが、ヨーロッパの昔話の特徴だと言えるだろう。

---

ヨーロッパ、および日本の昔話については以下のテキストを用いた。

Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Darmstadt 1983  
Hrsg. Derungs, Kurt: Die ursprünglichen Märchen der Brüder Grimm. Bern 1999  
Uther, Hans-Jörg (hrsg.): Europäische Märchen und Sagen  
[Elektronische Ressource], Berlin, 2004  
関 敬吾: 『日本昔話大成 第4巻本格昔話三』(再版) 角川書店 1985年

註

- 1 細谷瑞枝: 「禁じられた部屋と好奇心」—異界との関わり方に関する試論(1)—  
言語文化研究所紀要 第18号 茨城キリスト教大学言語文化研究所 2012年, 41—51頁
- 2 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Darmstadt 1983, S.46-50



- 3 Hrsg. Derungs, Kurt: Die ursprünglichen Märchen der Brüder Grimm. Bern 1999 S.26f.
- 4 同じくATU710タイプの「小さな黒い女 Die kleine schwarze Frau」(Colshorn, Carl und Theodor: Märchen und Sagen. Hannover: Rümpler, 1854.S95ff.)では、「部屋に入らないこと」の代わりに、「鍵を手放さないこと」が命じられ、命令に従っている限り、黒い女がだんだん白くなっていく。また、筆者は直接確認できていないが、「黒い女」では、禁じられた部屋の中にほとんど白くなった黒い女がいる。(カースト、ウェレーナ他:「悪とメルヘン」新曜社 2002, 32-32頁)
- 5 フォン・フランツ, M-L:『メルヘンと女性心理』海鳴社 1979 195頁
- 6 カースト、ウェレーナ他:前掲書, 191-192頁
- 7 同書:193頁
- 8 たとえば, KHM137「3人の黒いお姫さま De drei schwatten Prinzessinen」
- 9 高木昌史:『グリム童話を読む事典』三交社 2002, 278頁
- 10 von Löwis of Menar, August Arthur: Finnische Märchen.Nr.33, in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Deutsche Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004
- 11 「黒い婦人」(2-1)では、娘の生家のことは触れられていない。
- 12 「黒い婦人」(2-1)では娘が奉公へ行くところから話が始まり、親は登場しない。
- 13 関 敬吾:『日本昔話大成 第4巻本格昔話三』(再版)角川書店 1985年, 289-290頁
- 14 例外として、女が経を読んでいた苦労を覗くことで無にってしまった和尚が吹雪に迷って死ぬという話、禁じられた座敷に入った女が雌鶏になる話がある。
- 15 Schambach, Georg: Niedersächsische Sagen und Märchen. Nr.10, in Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Deutsche Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004
- 16 関 敬吾:前掲書, 297-298頁

### „Die verbotene Kammer und die Neugier“

#### — Über das Verhältnis zur unirdischen Welt in europäischen Märchen

Mizue Hosoya

In diesem Aufsatz wird das Verhältnis zur unirdischen Welt in europäischen Märchen mit dem Beispiel vom Märchentyp ATU 710 behandelt. Die Märchen ATU710 werden in zwei Gruppen geteilt je nach der Figur, die der Hauptfigur verbietet, eine bestimmte Kammer zu betreten. Bei der einen Gruppe ist die Figur die Gottesmutter Maria, und bei der anderen ist sie eine übernatürliche schwarze Frau. Die Hauptfigur, ein Mädchen aus einer armen Familie, tritt jedoch in die verbotene Kammer ein. Es ist auch je nach der Gruppe sehr unterschiedlich, was sie in der verbotenen Kammer gesehen hat, und wie sie sich nach der Vertreibung aus dem Himmel bzw. aus dem Schloss der schwarzen Frau verhalten sollte, um zum glücklichen Ende zu kommen. Zuerst wird dieser Unterschied mit dem christlichen Einfluß erklärt und dann wird es bestätigt, dass die Neugier auf die unirdischen Welt trotz des Unterschieds sowohl bei der Gruppe mit der Gottesmutter Maira als auch bei der mit der schwarzen Frau die erste Schritt zum Glück ist, während die Neugier bei den japanischen Märchen mit einer verbotenen Kammer meistens weder Glück noch Unglück bringt.